



TITLE:

静脩 Vol. 36 No. 4 (2000.3) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 36 No. 4 (2000.3) [全文]. 静脩 2000, 36(4)

ISSUE DATE:

2000-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66033>

RIGHT:



静脩

2000年3月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 36, No. 4

「18世紀フランス建築・都市資料」 平成10年度全国共同利用図書資料(大型コレクション)

京都大学名誉教授 加藤 邦男

平成10(1998)年度全国共同利用図書資料(大型コレクション)として購入され、京都大学附属図書館に収蔵された「18世紀フランス建築・都市資料」15タイトル全22冊は、平成2(1990)年度に同じく大型コレクションとして収蔵された「パリ市歴史・地誌関係資料コレクション」(144タイトル、273冊。『静脩』1991年7月、vol.28、No.1参照)を補完するものである。平成2年度のコレクションは、碩学として著名な歴史家Henri Sauval(1623-76)のHistoire et Recherches des Antiquités de la Ville de Paris, 3vols. 1724をはじめ、Jean Lebeuf, Germin Brice, Marcel Poëte, Jacques Hillairetらの著作に加えて、Jacques-Antoine Dulaureの著作や19世紀パリの大改造事業で有名なGeorges-Eugène Haussmannが主宰した叢書が含まれ、さらにPlan de Gomboustや現在でも盛んに引用されるPlan de Turgot(鳥瞰地図)その他のパリ市古地図帖が含まれて、充実したものであった。それは、フランスの歴史と文化が集約される中心地、驚くべき近代化の過程をたどったパリ市の、これまた著しい歴史的事象の探求、いわゆるギリシア語の語源的意味でのヒストリアを実証する膨大な資料的出版物の一端であっ

た。今回購入されたコレクションの内容は、18世紀から20世紀初頭にかけて成立したパリ市及びその周辺部における記念建造物の記述が9タイトルと、17世紀フランス東北部の主要都市地図集



(c.1667-68年刊)、16世紀の画家・彫刻家による遠近図法(1560年刊)、アネ城館の歴史的研究(1867年刊)、ヴェネツィア、サン・マルコ広場の図集(1831年刊)、イギリス海峡を望むエディストン燈台建設記録(1913年刊)リヨンの建築家Gaspard André 作品集(1898年刊)の6タイトルとなっている。そのうち、大小2つのトリアノン宮を扱った図版集1タイトルと、A.-J. Gabrielがルイ15世を記念して計画したルイ15世広場(現コンコルド広場)とその北端を限って対称的に構成された海軍省建物を扱った図録1タイトルとは、すでに京都大学工学部建築系図書室所蔵のものと同本であり、とくに後者は、同所蔵の叢書『パリの古い邸館Les Vieux Hotels de Paris』(14冊)に含まれている1冊である。

つぎに書誌的に見ると、本コレクションは16世紀、18世紀の初版本計3タイトルを含んでいるが、出版年代別では、16世紀刊行本1タイトル、18世紀刊行本2タイトル、19世紀刊行本7タイトル、20世紀初頭刊行本4タイトル、そのほか、上に挙げた17世紀東北フランスの都市平面図および景観図を聚めた地図集（おそらく17世紀の版画集）1タイトルである。

本コレクションにおいてもっとも重要なのは、18世紀フランスの建築理論家で、『建築講義 Cours d'Architecture』（9 vol, 1771-77）を著したJacques-François Blondel（1705-74）のもう一つの主著、『フランス建築』、すなわち *Architecture Française*, 4vols. Paris, Jombert, 1752-74（初版、全4巻）であろう。副題には、「もっとも著名な建築家が建造したパリの教会堂、王家の邸宅、宮殿、もっとも重要視すべき邸館とその他の建造物、及びパリ周辺部、フランスの地方に建つ城館及び別荘」とある。J.-F. Blondelの主著『建築講義』は、学生向けの教本であったが、この『フランス建築』は、とくに公共建築事業に関わる当時の官吏、政治家たちへの啓蒙を目指したもので、取り上げた建造物の選択には建築に対する著者の見識が働いている。総数498図にのぼる所収の正確な大判図版はもっぱら現場実測に基づいて作図され、各建造物の記述と建築類型別にしたがう論考が付されている。18世紀のフランスでは、秩序の普遍性を可感の形において見いだす設計よりも、個人的感覚を満足させる恣意的、装飾的な建築の表現が、フランス特有のロココ様式として流布していた。J.-F. Blondelは、そうしたロマン主義的風潮に抵抗して、17世紀を通じていわばその弁証法的対極として確立してきたフランスの古典主義的伝統の、秩序を重んじる正統的な価値を見直して、それを個々の日常生活にそれぞれ似つかわしく適合した形のもとに表すことを、コンヴナンス *convenance* の原理として主張し、そうした姿勢で行った建築教育の実践を通じて国の内外に大きな影響を与えた建築理論

家である。事実、1743年、芸術学校を自ら設立して、専門家のみならず一般人の教養をも視野に入れた公開講義を、年をおいて数回にわたり開催し、その成果が20年以上にわたって書き溜められた『建築講義』であった。またDiderot、D'Alembertの『百科全書』（1751-72）中の「建築」事項なども執筆している。J.-F. Blondelは、明晰、厳格、単純、壮大の秩序を特質として、普遍的レベルに到達したと自ら評価したフランス固有の優れた古典主義的建築作品の図版と記述を聚めて刊行することを企画するのである。それが『フランス建築』であった。それは、若い頃に関わった Jean Mariette, *L'Architecture Française*, 5vols. Paris, 1727-38の先例に発想を得たものであるが、しかもより発展させた企画であった。全8巻の出版が予定されたが、実際には、第4巻まで刊行された。第1巻（1752）は第1、第2書からなり、当時流布していた種々の様式を批判的に記述した建築概論から始めて、フォブール・サン・ジェルマン地区の主要建造物を扱い、そのなかでもとくに、^{オテル・ロワイヤル・デサヴァリド}Liberal Bruant, J.-H. Mansartらの王立傷兵院が注目される。第2巻（1752）は第3、第4書からなり、リュクサンブール地区とシテ島、サン・タントワヌおよびマレ地区の主要建造物を扱い、なかでもLouis Le Vauのコレージュ・デ・カトル＝ナシオン（現フランス学士院建物）が注目される。第3巻（1754）は第5書でなり、サン・トノレ地区の主要建造物が扱われ、自らの実測に基づくサン・ドニ記念門（1671、建築家François Blondel）及びこの門の建築家の弟子Pierre Bulletの手になり（1674年建造）J.-F. Blondel自身もその装飾に関わったサン・マルタン記念門（1745年装飾）の図面収録が注目される。第4巻（1756）は第6、第7書でなり、ル・ルーヴル及びチュイルリーの宮殿とヴェルサイユ宮殿が扱われている。以上の各巻には挿入すべき約50から140余りの図版のそれぞれに関して、装丁者への丁寧な指示一覧が付されている。第5巻以降に予定されていた未刊行の巻

には、ヴェルサイユ庭園中に建設されたトリアノン（1687年改修のJ.-H. Mansart のグラン・トリアノン邸館）など、王家の邸館、造園術、内装装飾、建築のオーダー等の記述が収録されるはずであった。

J.-F. Blondelを18世紀フランス古典主義の理論家とすれば、権威ある王立アカデミー会長の要職についたAnge-Jacques Gabriel（1698-1782）は、実践家としてJ.-F. Blondelと一対をなす建築家であった。本コレクションでは、18世紀の古典主義の理念をヴェルサイユ庭園中にもっとも純粋な形に実施したGabrielの小トリアノン宮殿が、J.-H. Mansartの大トリアノン宮殿と関連させて収録された図録4タイトル（19世紀末から20世紀初年の刊行本）及び大記念碑的建造物である海軍省の外部、内部のデザイン及び前面のルイ15世広場（現コンコルド広場）の図録（1922年刊）も注目される。Gabrielは、厳格な古典主義的理念とプライバシー、快適性、新奇性の楽しみなどを求めた当時のブルジョワたちの趣味を両立させる柔軟かつ洗練された構成力を有して成功した建築家であった。建築物の形姿を限る輪郭の厳格さ、形態構成の揺るぎなさ、装飾を制限した単純な造形の強さによって、当時流行していたフランス建築の軽薄さを是正しようと努めて、成功したのであった。J.-F. Blondelと同様に17世紀の正統派の建築家を自らの模範としたGabrielは、保守的であると同時に、近代を予告する簡潔な合理的形態を産み出し、その徹底した前衛性によって、18世紀フランスの新古典主義者のなかでももっとも傑出した建築家の一人と言える。

パリ市庁舎に関する興味深い著書2タイトルが見られる。パリ市庁舎は14世紀末以来セーヌ川に向かって傾斜した右岸のグレーヴ広場に面して建設され、今日までその位置を変えることはなかったが、時代の流れのなかで、市庁舎そのものは、1830年頃までに、その周辺に建て込んできた教会、病院などの諸施設を整理し、さらにG.-E. Haussmannのパリ大改造事業によっ

て一街区として独立した4立面を有する記念碑的建造物となった。現在の市庁舎は、1871年のパリ・コミュン事件によって焼失した後、一部壁面保存をしながら1882年に改築されたものである。R. Pitrou, Recueil de Differents Projets d'Architecture et Autres concernant la Construction des Ponts, 1756（大判図版35図を収録）は、ルイ15世の時代、シテ島のノートル＝ダム大聖堂北側に、都市整備計画の一環として、古典主義的様式の庁舎を建設するための新築計画案を収録している。1770年には現在地で現庁舎の中核部を為す部分が完成するのであるが、重要な歴史的ランドマークであった市庁舎がこの啓蒙主義の時代に、新たに古典主義の様式と思想のもとに提案されたのが見られて、興味深い。また計画全体にわたって、当時の発達した土木建築の技術的な取り扱い方法もうかがえて、注目される。これに対して、M. Vachon, Le Nouvel Hotel de Ville de Paris, 1872-1900,（1900）では、現在に伝わる市庁舎の1882年改築の経過を詳細に紹介していて、当時の文化遺産の認識とその取り扱い方を知ることができるのである。

S. de P. de Beaulieu（?-1674）は、軍事作戦に必要な精密地図の制作者として知られる。De Beaulieuの『17世紀フランス東北部の主要都市地図集』は、アルトワ、フランドル、リュクセンブルグその他の地方が、フランス国王の領地として獲得されたことを記念して成立した。それは、1667年頃のこの地域における諸都市を著した地図集10巻を3冊にまとめて帙に納めたもので、都市の平面図、城塞外郭図、市外からの眺望景観図など210点からなっている。形式的にはこれは、当時出版された種々の都市景観図などの一種であるが、欠落図があるものの、良好な状態を保つ、まとまった17世紀の古版地図集として貴重である。

いままで言及しなかったJehan Cousin（c.1490-c.1560）の『透視図法』（1560）とAntonio Quadri（1777-1845）の『ヴェネツィア

のサン・マルコ広場』(1831)、その他の資料にも興味のある点は尽きないが、総じて言えば、平成2年度の大型コレクションに比べて、量質ともにささやかではあるものの、とくにフランスに伝統する18世紀の新古典主義的、あるいはより一般的にフランス建築を特色づける、あの人間性に立脚した柔軟な理性の精髓を具体的に捉えて、パリ市及びその周辺環境の建築的な姿を示す資料として、平成2年度の大型コレクションを補完すると言えると思うのである。

(かとう くにお)

図版：

図1．

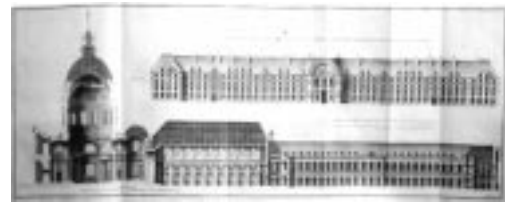


『17世紀フランス東北部の主要都市地図集』所収のリュクセンブルグの平面図と景観図、c.1667

Le Duché de Luxembourg in Provinces eschûes à la Reine Tres-Chrétienne Marie Therese infante d'Espagne, Paris, c. 1667. S. de P. BEAULIEUX, Les Plans et profils ... du Duché de Luxembourg.

この景観図が示す様相は、今日のルクセンブルグ旧市街にその趣が残されている。山岳地帯の自然のなかに建設された要塞都市の様子が克明に描かれている。都市のシルエットが盛り上がり、その頂上をなす高い塔屋は、ノートル＝ダム大聖堂とおもわれる。丘陵の麓を巡る都市壁の外を蛇行する水路に沿って画面の左下方に、Alsitz Rの記入が見えるが、これは、現在のアルゼット川に当たる。平面図では、当時盛んに計画、建設された要塞都市に共通な、突起を有する星形の都市平面が描かれている。周りを取り囲む丘陵群や都市を迂回して蛇行する川などに、自然の微地形を巧みに利用しながら全体として調和した環境の都市の姿がうかがえる。

図2．



J.-F.ブロンデル『フランス建築』第I巻、1752、第2書、第1章所収のパリの「王立傷兵院」北側主立面図(上図)および南北縦軸方向断面図(下図)

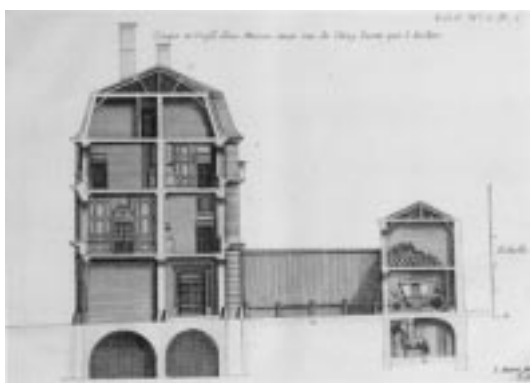
L'Hôtel Royal des Invalides in Jacques-François BLONDEL, Architecture Française, tome I, 1752, Livre second, Chapitre 1er.

オテル・ロワイヤル・デサンヴァリド

王立傷兵院は、ルイ14世の命を受けリベラル・ブリュアンLiberal Bruant(1635-97)が設計した退役傷痍軍人の収容施設で、広大な広場を前面に介してセーヌ川と直交するパリ市の都市軸の一つを決定する建築複合体である。この主立面の中央部には、イオニア式オーダーによる左右二組の壁付き双子柱の上に円弧状のアーチを戴くポルタイコ風の楼門が張り出し、左右両端部に翼^{パヴィリオン}屋を具え、17世紀以来の典型的な宮殿形式を横長に構成している。本書の記述では、中央突出部の高さが78 ピエ(約25メートル)であるのに対して、立面の全長は101 toises

(約197メートル)に及ぶ。縦軸断面図は、上記の北側正面楼門から南端にジュール＝アルドアン・マンサールJ.-H. Mansartの傑作、サン＝ルイ礼拝堂付属のドーム・デ・ザンヴァリッドに至る断面構成を示す。このドームの断面図には三層構造が明瞭に見て取れ、興味深い。ここには後に、ヴィスコンティLudovico-Tullio-Joachim Visconti (1791-1853)の設計によってナポレオンの墓廟となったことはよく知られている。

図3 .



J.-F.ブロンデル『フランス建築』第III巻、1754、第5書、第5章所収のクレリーCléry通り、エストラードEstrades伯爵夫人邸断面図

Coupe et Profil d'une Maison située rue de Cléry, bastie par I. Richer in Jacques-François BLONDEL, Architecture Française, tome III, 1754, Livre 5, Chpitre 5.

本書は、この邸館がクレリーCléry通りに、建築家ジャン・リシェールJean Richerの設計によって17世紀末に建設されたと記している。断面図では、前面街路に面する主屋と背後に中庭を囲む倉庫が描かれている。母屋の簡素な内部装飾と倉庫内に納められた四輪馬車と地下の馬が目を引く。三角形の敷地に計画された平面図から判断すると、この邸館は、クレリーCléry通りとグロ＝シュネGros-Chenet通り（後者は現在のサンチエSentier通りに併合されている）とが交差する角地に位置する。クレリー通りは、現在のアブキールAboukir通りとそれに続くル・マイユLe Mail通りと平行に並ん

でいる。これらの通りは、サン＝ドニ門とヴィクトワールVictoине広場をつないでいる。いずれも、シャルル5世市壁のサン＝ドニ門以西が1634年から解体されてルイ13世の市壁へと拡張されるのに伴い、解体された市壁跡地に開設された街路である。これらの街路に沿って土地区画分割が規則正しく行われて、多くの邸館が建設された。1991年、京都大学附属図書館に収蔵された『パリ市歴史・地誌関係資料コレクション』中のPlan de Turgot(1734)に、この開発後の様子が見事に描き出されている。このエストラード伯爵夫人邸も、そうした都市開発の一環として建設されたものであろう。それは、セーヌ県知事オスマンGeorges-Eugène Haussmann(1809-91)のパリ改造事業の一つである1896年のレオミュールRéaumur通り開設の結果、消滅した。シャルル5世の市壁解体からオスマンの都市改造事業まで存続したパリの貴族住宅の詳細を示す注目すべき資料である。

図4 .



シテ島に計画された市役所Hotel de Ville全体配置図および庁舎前庭に面する正面立面図・翼

棟並びに地下船着き場断面図。

Plan de L'Isle du Palais où l'on voit la Disposition Générale & Élévation de l'Hôtel de Ville du Côté de la Place avec la coupe d'une aile et du port couvert in R. Pitrou, Recueil de Différents Projets d'Architecture de Charpente et Autres Concernant la Construction des Ponts, Paris, chez la Veuve de l'Auteur, 1756.

本図は、フランス土木局の監視官として知られる建築技師ピトルーR. Pitrouが実施ならびに計画したプロジェクトを集成した3部構成本中の第1部に収録されている。シテ島（本文中ではIsle du Palaisと呼ばれている）において、王の記念像を中心にして計画された円形広場と前庭^{アヴァン・クール}を介してそれにつながる市庁舎の計画である。当時のシテ島では、16世紀から17世紀以来、整備が行われたポン・ヌフ記念橋や裁判所がある西部に比べて東部では、劣悪な住居群、四輪車が回転することが困難な幅員5～6ピエ（2メートル弱）の街路、感謝式^{テ・デ・ウム}などの祭礼のたびに群衆で溢れかえる大聖堂前など、不良な都市環境問題が残されていた。ピトルーは、こうしたシテ島の混雑した高密度街区の状況を改善し、大聖堂前面広場^{バル・ヴィ}を設け、セーヌ川の護岸、船着き場を整備してこの地区の商業発展にも寄与する、壮大な国王の記念計画案を提案している。計画図には、円形の王の広場、市庁舎に加えて、新しい河岸や橋梁などが見られる。とりわけ、断面図に見られる地下船着き場port couvertの提案は、興味深い。

図5 .



パリ市庁舎の旧正面立面図中央部分

La Façade Centrale de l'Ancien Hôtel de Ville in Marius VACHON, Le Nouvel Hôtel de Ville de Paris, 1872-1900, Édition du Conseil municipal, 1900.

18世紀以来整備拡充されてきたフランス近代化の牙城パリ市庁舎はネオ・ルネッサンス様式の建築物として1870年までには完成していたが、1871年、パリ・コミューヌの事件によって焼失した。市庁舎再建に際して、1872年6月から7月に開催の市議会で、旧庁舎の正面立面の完全な復元が満場一致で議決されたと本書は記している。新庁舎の設計は、バリューThéodore Ballu、デベルトPierre-Joseph-Édouard Déperthes、フォルミジェJean-Camille Formigéの3人の建築家に委託された。しかし、復元した旧庁舎正面を中央突出部にもつ再建された新庁舎立面には、以前よりも数多くの彫像を壁面や屋根の棟など随所に配置して、建築構成の骨組みが曖昧になってしまっている。本図は、フランス・ルネッサンスの香りが漂う再建直前の旧い立面図である。本書中には再建後の立面写真が掲載されているので、比較すると興味深い。

図6 .



18世紀における小トリアノン宮殿と庭園の全体配置図（バルタールBaltardの版画による）

Plan Général des Constructions et des Jardins à la fin du XVIIIe siècle, d'après la gravure de BALTARD in Léon DESHAIRES, Le Grand Triannon & Le Petit Triannon, Librairie des Arts Décoratifs, 2 vols.(1910年頃)

本書は、大トリアノン宮殿Le Grand Trianonと

小トリアノン宮殿の記述とが分冊となって構成されている。本図は小トリアノン宮殿の冊子に収められている。この図の右下に添えられているガブリエルAnge-Jacques Gabriel設計の宮殿平面図は端正な正方形をなし、イタリア・ルネッサンスの建築家パッラディオAndrea Palladio(1508-80)のロトンダと呼ばれるカブラ邸villa Capraを思わせ、この宮殿の完結的な外観の力強い直線的なデザインは、ガブリエルの完成した古典主義的傾向を表している。ジュール＝アルドアン・マンサール J.-H. Mansart(1646-1708)の設計になる、ルイ14世時代のフランス・バロックの大トリアノン宮殿の建築と好対照をなす。

図7 .



1791年頃のルイ15世広場の透視図（タラヴァル Taravalの版画による）

Vue Perspective de la Place Louis XV, vers 1791, d'après la gravure de Taraval in Le Ministère de la Marine. Notice historique et descriptive par J. Vacquier. Paris, chez F. Contet, 1922 dans la collection de Les Vieux Hôtels de Paris.

ルイ15世広場（現在のコンコルド広場）の競技設計を勝ち取った建築家ガブリエルA.-J. Gabriel設計により、石造欄干で取り囲み堀を巡らせた八角形の広場が建設された(1755-75)。広場の八つの隅には巨大な石造の台座上に彫像が据えられ、広場中央にはルイ15世の騎馬像が置かれた。その後、堀では祝祭の花火大会で群衆事故が起こり問題となった。大革命時には王の騎馬像が引き抜かれ、革命広場となって国王の処刑場と化し、希望の意を込めてコンコルド広場と命名され現在に至っている。図版中央、騎馬像の後方にはガブリエル設計による左右対称に配置された一対の典型的な古典主義の建造物が見える。それはペローClaude Perrault(1613-88)の設計と言われるルーヴル宮殿東正面の構成を意識したものであるが、広場中心に据えられた王の騎馬像の背後に、双子の宮殿建築の中間を貫通するロワイヤル通りの彼方は空白のままである。やがて間もなくそこにヴィニヨンPierre Alexandre Vignon(1765-1828)が設計する古代神殿風のマドレーヌ教会堂正面(1806-42)が焦点を決めることになる。双子の宮殿の向かって右翼棟は「国有備品保管建物Le Garde-Meuble de la Couronne」として建設され、大革命時には略奪され、後に海軍省Le Ministère de la Marine庁舎となるのである。

追記：本稿を草するにあたって、資料の精査および図版の選択、解説のための調査には、松本 裕氏（京都大学大学院工学研究科博士後期課程在学院生、大阪産業大学講師）の手を煩わせた。

書庫の一隅にて

附属図書館館長
経済学研究科教授

菊池光造

経済学部で目的の本を手にした後、しばらく興のおもむくままに書架を眺めていた。書架の一番下、足もとのところに、背文字が擦れてまったく読めない分厚い本が見えたので、抜き出してみた。それは河合栄治郎著『トーマス・ヒル・グリーン思想体系』であった。この本は、昭和5年に上下2冊本として刊行され、版を重ねて合本1冊本として昭和13年に刊行、手の中にあるのはその第7版（昭和16年刊）である。社会思想や社会政策を専門領域とする私にとって、この本はさまざまな想念をかき立てる。

トーマス・ヒル・グリーンは、19世紀末イギリスで台頭した「新自由主義」思想運動の中心人物であった。それまでのイギリスは、古典的な個人主義的自由主義に浸されて、生活問題や貧困などは個人の自己責任の問題とされ、個人の慈善は奨励されても国家による社会政策・福祉政策は極小化されていた。

19世紀第4四半期の長く深い不況は、大量の失業・貧困とともに、イギリスに社会主義運動の台頭をもたらした。こうした歴史の現実に直面した個人主義的自由主義の対応形態が、理想主義・人格主義を内容とし、社会改良をも視野に置く「新自由主義」であった。

グリーンは、自由な個人の人格の完成・自己実現のためには、これを可能にする「環境」＝「社会的条件」が必要であるとした。失業や貧困、総じて社会問題を解決して、個人の人格完成の基盤を整備することは「社会の責任」であ

る。かくて自由放任ではなく、自由主義の延長線上に国家による社会改良の営為・政策実践の必要性和必然性を位置づけたのであった。こうした「新自由主義」の思想的土壌の中から、ケインズ経済学や、ウィリアム・ベヴァリッジの社会保障プランも生み出されることになるのである。「ドイツ・日本型」社会政策論と「アングロ・アメリカ型」社会政策論の総合を試みる私にとってグリーンは政策思想の展開史のなかで正当な位置づけを要求しているといえよう。

ところで、「ドイツ・日本型」社会政策論が主流を占めた戦前の日本で、この本の著者であり強烈な個性を持つ自由主義者河合栄治郎が、みずからの社会政策原理を構想するに当たって、グリーン思想体系の中に拠り所を求めたのは、卓見でもあり、また必然の成り行きでもあったといえよう。

河合栄治郎は、農商務省商工局に勤務、海外の労働事情を視察して現在の労働基準法にあたる「工場法」案を起草したが、上官と意見があわず官を辞し、大正14年以降東京大学経済学部で社会政策論を講じた。一方、『学生と教養』『学生と読書』など学生叢書15巻を編集・刊行して戦中・戦後の青年・学生に大きな影響を与えた「教師」であり、自由主義のオピニオンリーダーでもあった。その河合が、戦前期の時代状況の中で思想犯罪に問われたということも、この本を手にして思い起こされる。

昭和13年秋、河合の著書『改訂社会政策原理』『ファシズム批判』『時局と自由主義』『第二学生生活』の4冊が、突如発禁処分を受けた。翌14年2月にはこれらの著書が「安寧秩序ヲ紊ルモノ」として河合は起訴され、15年10月に一旦は無罪判決が出るが、検事側控訴によって、東京控訴院で有罪判決、昭和18年夏には



トーマス・ヒル・グリーン

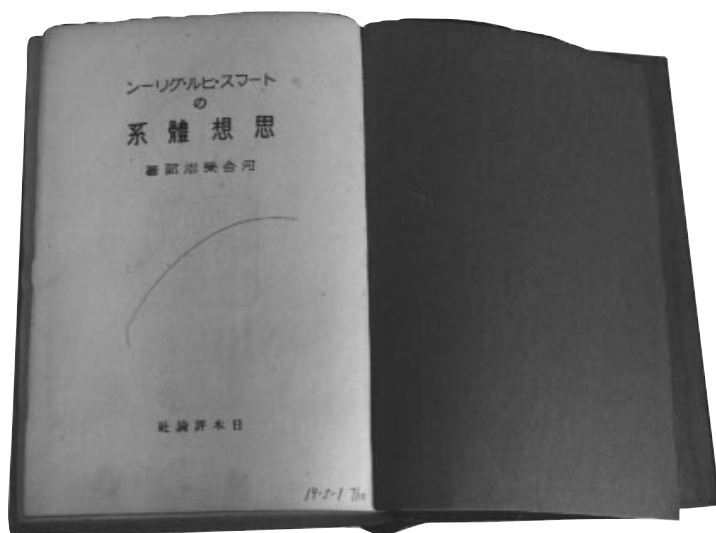
大審院で有罪判決が確定し、その後一切の文筆活動を禁止されることになったのであった。

ふりかえれば、すでに昭和3年いわゆる「三・一五事件」で社会主義派の研究者たちが大学を追われ、昭和8年には人権擁護に配慮する京都大学教授滝川幸辰の「刑法読本」が時の権力によって指弾され、昭和10年には美濃部達吉博士の「天皇機関説」が貴族院で問題化するなど、国家主義・国粹主義思想の波がひたひたと教育研究の世界にも打ち寄せていた。昭和13年には、大学人として学問の自由・大学の自治の立場から思想を異にするマルクス経済学者大内兵衛を擁護した河合栄治郎自身が、その直後に今度は自由主義的著作の責を問われて起訴さ

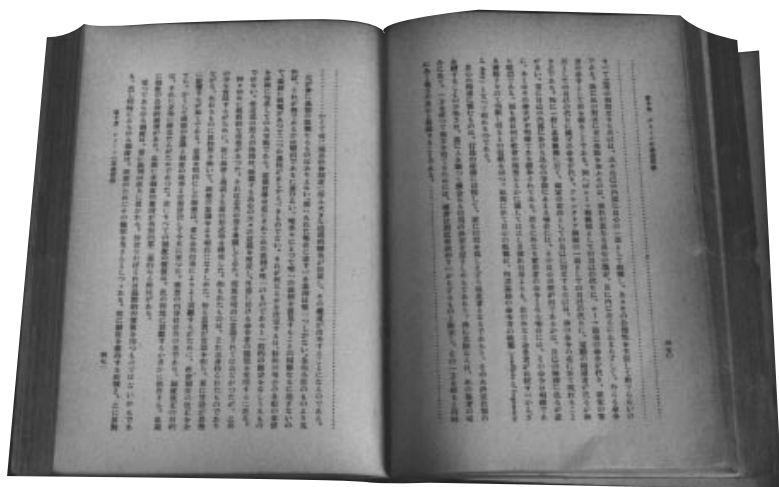
れるにいたったのである。私が手にした昭和16年版『トーマス・ヒル・グリーンの思想體系』にも、検閲による数行の「伏せ字」が見られる。河合自身は昭和19年2月、終戦を待たずに病死した。しかし、この河合の著書が、戦中・戦後の学生たちによって背文字が擦れて消えるほどに読まれたことも忘れてはならないだろう。

私は、たまたま手にした1冊の本が呼び起こす想いについて触れた。だが、京都大学図書館の60余個所におよぶ図書室・書庫では、随所で歴史を映す書物たちが、今日もひそかに息づいているに違いない。

(きくち こうぞう)



河合栄治郎著
『トーマス・ヒル・グリーンの思想體系』
昭和16年版



検閲による「伏せ字」

リディア・エリザベト・デル・リット夫人遺贈 『フランス古書簡「マルク・ポスタル」コレクション』について *Collection des Correspondances Anciennes et Marques Postales,* Don de Mme Lydia Elisabeth DEL LITTO

京都大学名誉教授 鈴木 昭一郎

19世紀に切手が実用化されるまで、ヨーロッパで、手紙はどのようにして送られていたか。17世紀末までは郵便制度そのものが存在しなかった。民間で遠く信書を送るには、たまたま知人が旅にでるという「幸便」に託すか個人的に「飛脚」を立てる他はなかった。したがってその時代の手紙には、一般に発信地や受信地の痕跡が残されていない。

18世紀になると駅馬車の発達で初期の郵便制度を生み出すことになった。封筒はまだ用いられず、手紙は裏返して折りたたみ、それを三つ折りにして左右または上下の端を互いに差しこんで封蠟でとじ、反対面に宛名を記して駅馬車の宿駅（ポスト）へ持参すると、宿駅の長が宛名の面に手書きでマークを入れた、それがマルク・ポスタル（*Marque postale*）つまり宿駅のマークである。料金は原則として受取人払い、公文言は前払いで、その場合は手書きでP. P. (*port payé* 料金支払済)と記入された。やがてこれらのマークにはスタンプが併用され、発信地・中継地・受信地の市町村名が県番号とともに印字され、ポストという語も「宿駅」から現在の郵便局・郵便制度に近いものをさすことになる。

世に切手の蒐集家は多いが、このマルク・ポスタルも好事家の垂涎的である。郵便切手はそれだけの存在だが、マルク・ポスタルは、それが記入された手紙と不可分であり、手紙の歴史的・社会的・文化的な価値が加わる。また最近の「肉筆もの」への嗜好がますます高値をよんでいる。ところでこの『フランス古書簡「マルク・ポスタル」コレクション』（2300通＋枝

番）が京都大学附属図書館に寄贈された。寄贈者はグルノーブル大学名誉文学部長・名誉教授ヴィクトール・デル・リット氏夫人、故リディア・エリザベト・デル・リット女史である。デル・リッ



Mme L. E. Del Litto

ト氏は私の恩師、スタンダール研究の権威であり、1984年にはフランス政府文化使節として来日され、京都大学文学部でも講演された。ご夫妻にはお子様がなく、コレクションの散逸をおそれて私に下さると申しでておられたのを、私が京都大学への寄贈を条件にお預かりしていたのである。あまりにも高価で、また稀有の文化財であり、ご夫妻のご好意は頂くとしても、私が死蔵することは躊躇された。

贈呈式は1998年10月22日、総長長尾真先生と附属図書館長菊池光造先生が署名されたデル・リット氏あての見事な装幀の感謝状を、菊池先生から図書館長室で、大学院文学研究科教授吉田城氏と図書館事務局の多くの方々の列席のもとに、デル・リット氏の代理の私にお手渡しいただくという形で行われた。感謝状にはこの「コレクションがマルク・ポスタルとしての大きな価値はもとより、その時代のフランス社会と文化を研究する上で極めて貴重な学術資料であり、本学へのご寄贈を心から喜ぶ」旨が明記され、デル・リット氏からは、総長と図書館長の双方に10月31日付で、パリ市立歴史図書館からの記念品とともに受領書が発送された。私が1987年8月15日、まだご存命であったデル・リ

ット夫人と契約書をかわし、コレクションを京都に持ち帰り、電算化の項目を策定し、その項目と記入箇所を表紙に、宛て先とマルク・ポスタル面を裏表紙に複写したシートに手紙を1通ずつ収め、シートに通し番号をつける作業を始めてから、すでに11年が経っていた。



吉田城教授 著者 菊池光造館長

南フランス、アルデッシュ県、ローヌ河の右岸にトゥルノンという町がある。現行の道路地図でパリから550km、リヨンから88km、グルノーブルから98km、マルセイユから237km、現在では対岸のタンと併せてタン・トゥルノン(Tain-Tournon)とよばれる人口15,000人の地方都市。18世紀に、ここにボテュ家 Les Botu という法曹家の一家があった。デル・リット夫人のコレクションは、この一族の間の私信、この家族あての手紙、あるいはこの一家に保存されていた民事・商事関係の書簡が主体である。時代的には、主としてフランス革命からナポレオンの第一帝政・王政復古のころで、当主エミール・ボテュが、彼あての手紙に言かれた肩書 Procureur du Roi (アンシアン・レジーム下の地方裁判所首席検事)、Vérificateur des domaines du Roi (王室土地財産検査官)、Procureur impérial (帝政下の検事)、Juge auditeur (傍聴裁判官)、Juge d'instruction (予審判事)、Maire (市長) などの要職を歴任した時代であり、また地理的には、古代から地中海と北海をむすぶ要路であったローヌ河とソーヌ川を縦軸に、南はプロヴァンスから北はシャンパーニュ地方、横軸は南に広く北に狭く、南

では東のイタリア・ピエモンテ地方から西のポルドーまで、逆丁字形に広がる当時の南仏の地域経済・文化圏を示している。

電算化の項目は、それぞれの書簡について、A.登録番号、B.箱番号、C.発信年月日、D.紙形、E.紙質、F.体裁、G.保存状態、H.発信地、I.中継地、J.受信地、K.マルク・ポスタルの同定、L.発信人氏名、M.受取人氏名、N.手紙の内容であり、その読みとりが進められている。現在までに解読した手紙のうち、もっとも古いものは1668年4月27日の日付をもち、最も新しいものは19世紀末、初期の通常切手を貼ったものである。すなわちこのコレクションは、ブルボン王朝の初期から第三共和制初期にいたる南フランスの歴史的・経済的・政治的・風俗的・文化的諸相を「小さな具体的事実」で伝える第一級の一次資料であり、その学術的価値ははかり知れない。したがって上記の項目のうち、マルク・ポスタルとしての市場価値にかかわるD.E.F.G.Kには今回は手をつけていない。店頭価格で時価数億円になるはずだが、見積り可能な業者はロンドンに一社しかなく、また見積りということ自体、散逸をおそれたデル・リット夫人の遺志にそう所以ではなかった。

解読作業は1999年夏に始まり、現在、総合目録作成の第一段階として、全資料の基本データ(発信人・発信地・受取人・年月日等)の解読・記録を終ろうとしている。2000年度以降はこれらの情報をもとにデータベースの作成を開始し、このデータベースを基礎に総合目録を作成したい。家系図、書簡内容の記述、一部書簡の電子ライブラリー公開をめざした転写・翻訳にも着手したところである。地域研究・歴史研究の一般資料としての活用には、このような地道な作業が不可欠だからである。書簡内容の公表にはプライバシーの問題が残るが、総合目録の刊行は、すでにデル・リット氏のご了承をえている。



登録番号 98084840

このデータベースの利用は今後、多方面に指向されよう。地域研究が重視される現在、『デル・リット・コレクション』に基づく南仏文化経済圏の歴史的研究(仮題)とも言うべき重要な研究のコーパスとなる。この資料は、200年間にわたる時の流れのなかで、南仏の歴史的・経済的・政治的・風俗的・文化的諸相に多様なアプローチを可能にする。歴史的には未知の多くの事実を提供し、経済的には特に18世紀における経済成長・物価の変遷、政治的には大革命期

以降の連邦・地方分権主義と中央集権主義の対立、風俗的文化的には、文化人類学・「民俗学」的分析を可能にし、さらには地域コミュニケーション論、フランス語地域語史・語彙・語法論・書簡文体論にも展望をあたえるであろう。

資料の解説・総合目録の作成と電算化に着手するには、多くの参考文献と機器、高度で緻密なマンパワーが必要であった。予算措置の実現のため多大のご配慮をいただいた関係各位、解説に協力された奈良女子大学大学院文学研究科博士課程井岡てるみ、京都大学大学院文学研究科博士課程辻川慶子・駒田登紀子・折井穂積・山田礼雄の諸氏に感謝し、またすでに現役を退いた私と附属図書館との仲介の労をとられ、数々の貴重な助言を惜しまれなかった吉田城氏に改めて深謝し、併せて今後のお力添えをお願い申し上げたい。

(すずき しょういちろう)

附属図書館百周年

「『静脩』総目次」を読む

附属図書館情報サービス課雑誌・特殊資料掛長 松田 博

展示会に目をやると、第1回が1900(明治33)年12月10日～11日に「附属図書館創立1周年記念展覧会」のテーマで開催されている。『静脩』には創刊の年1964年9月に開催された「ルーマニア図書展」以降の展示会記事が収録、紹介がなされている。一方、これとは別に部局毎、たとえば法科大学における1916(大正5)年2月13日の「マルサス生誕150年記念会展示」をはじめ、文学部、経済学部等で開催された展示会の内容が紀要等に収録、紹介がなされている。いずれにしても、これらをみていると、「テーマ」自体の重複も少なく、当時の担当者の工夫や努力、個性や創造性がひしひしと感じられるのである。附属図書館100年のこれまでの開催回数は、

掌握できるところで120回、『静脩』刊行後でも64回を数える。「貴重書展」、「維新展」をはじめ順を追って振り返ってみると、これまでのもので企画等規模が最大のものは1997年10月開催の「京都大学創立百周年記念展覧会 知的生産の伝統と未来」であり、また展示回数等異色なものは、「貴重書展」にたびたび登場し、それ自体の展示会でも1957年10月および1963年6月の2度にわたり開催されている「谷村文庫展」であるように思う。それだけにこの谷村文庫にまつわりそうな話題には興味がそそられる。そのひとつは谷村の収書姿勢についてであり、ふたつには藤本ビルブローカーと『国富論』をめぐることについてである。

谷村文庫については、「谷村文庫」(1)や『京都大学谷村文庫目録』(1963年)に詳しい。この『目録』の序文にもふれられているが、文庫の旧蔵者は藤本ビルブローカー銀行取締役会長であった谷村一太郎(秋邨)で、彼が“半世紀にわたって採集、愛蔵した和漢古書の集書で”“ほとんど和漢の稀覯書で満たされ、その豪華さ、潤沢さは氏の趣味の広さと、教養の高さを遺憾なく反映”する内容のものであった。猪苗代家の連歌集書、奈良朝写経、平安朝写経、鎌倉時代写経ほか、春日版、高野版、慶長・元和の古活字版等があり、特に五山版は内容的にも豊富であるとされている。これら谷村旧蔵書が、元附属図書館長新村出の進言を容れて京都大学に寄贈されたのは1942年のことであり、冊数は谷村愛蔵書のすべて9200余冊であった。翻って、この『目録』には和漢書とともに8点の洋書が見受けられるが、この冊数は和漢書に比し極端に少なく、すこし異なった印象を受ける。このことはむしろ、洋書についても関心のあったであろう谷村が、和漢書購入のために自重していたのではないかという思いを抱かせる。

谷村一太郎は1906(明治39)年10月16日、藤本ビルブローカーが株式会社として再発足する際、その発起人の一人として加わり、取締役に就任している。この藤本ビルブローカーは、藤本商店を先代から引き継いだ藤本清兵衛によって1902(明治35)年に設立され、無限責任の個人企業としてそれまで運営されていた。一方、藤本ビルブローカー銀行は、同じく藤本清兵衛によって1895(明治28)年に設立されているが、その後紆余曲折を経たこの銀行に1920(大正9)年7月28日、谷村は横田義夫とともに代表取締役に就任、1925(大正14)年10月12日には会長に就任している。この間、1919(大正8)年6月12日から12月17日の半年間を社員3名とともに外遊し、ニューヨークには4ヶ月間滞在している。

ところで、経済学部は、1919年に創設されてまもなくの1923(大正12)年6月5日に「アダム・スミス生誕200年記念会」を開催し、その一環

として展示会を尊攘堂で行っている。この展示会への出品には河上肇、本庄栄治郎等に混じって大平賢作、長崎高商武藤長蔵、東京商大高垣寅次郎等の名がみられ、機関についても附属図書館や文学部とともに同志社大学、大原社会問題研究所、藤本ビルブローカー銀行調査部等の名がみられる。これら出品に応じた機関の中にあつて、藤本ビルブローカー銀行調査部所蔵にかかるものは、スミス『国富論』初版をはじめとした洋書4点であった。

この大正12年という年は、先にみたように谷村が藤本ビルブローカー銀行の取締役就任等“社運の進展に挺身して会社興隆の基礎を築”き、昭和8年の引退に至るまで“輝かしい業績を残した”時期に相当している。またこの頃、自らが招聘した大山寿(京都帝大大学院で経済学を学び、榊田民蔵とも親交があった)が調査部部長に就任し、大山と二人三脚で調査部を飛躍的に発展させた時期でもあった。さらに、谷村は“経済学者海保青陵の遺著を探求して「青陵遺編集」を編纂し、あるいは「青陵陰陽談」のごとき経済学の専門的著述”を著し、『まびき』、『素駄架』等の専門的随筆を著したことにみられるように、経済学にもたいへん造詣が深かった。したがって、当時谷村が銀行調査部の資料収集に大きな影響力をもっていたと考えられ、そのなかで『国富論』を購入したとしても不思議ではないと思われるのである。このことは、“当時の藤本ビルブローカー銀行の調査部は、・・・その所蔵図書も第一次大戦後、谷村一太郎らの海外渡航後急速に増し『ロンドンエコノミスト』『ステイタス』その他海外経済雑誌のバックナンバーまで完備しており、・・・”との記録をみるにつけ、いっそうの思いを強くするのである。このようにみえてくると、谷村は洋の東西を問わず古典籍に対し見識をもっており、したがって関心を抱いた洋書は一体どのようなものであったのか、大山寿との関係も含めて興味はつきないのである。ただ、ここでは谷村がにもかかわらず自らは自制・自重していたのではないかと

いうことを繰り返すにとどめる。

次に『国富論』初版 1776年」の所蔵についてみておきたい。先の経済学部「スミス展」に、藤本ビルブローカ銀行調査部所蔵のものを含め『国富論』初版」が8部も出陳されたということ自体おどろきであるが、この8部以外に大原社研にもう1部、一橋大(メンガー文庫)、東大、慶応大、早稲田大、名大に各1部、個人では大西猪之助、尾高典作、高橋誠一郎、福田徳三、竹内謙二等に各1部の所蔵があったと思われる、また直後には東北大学および堀経夫が購入しており、初版が500部の発行部数であったことを考えると、当時日本の経済学にあってスミス受容はかなり高い位置にあったことがうかがえる。ここで、これら出陳された『国富論』8部のうち所蔵が現在と異なるものについてわかるところをふれると、大原社会問題研究所所蔵のものが大阪府立中央図書館(府立図書館天王寺分館、府立夕陽ヶ丘図書館を経て)に、武藤長蔵所蔵にかかる1部が長崎大学に、本庄栄治郎所蔵のものは松山大学に、河上肇所蔵のものは寿岳文章を通して関西学院大学に、それぞれ譲渡や寄贈がなされている。このうち関西学院大学を例にとると、所蔵や所蔵に至る経緯について一部割愛するが以下にみるような紹介がある。

- 1) アダム・スミスの会「アダム・スミスの著書(主要版次)全国所在一覧」『アダム・スミスの味』東京大学出版会(1965年6月)
- 2) 松田 寛「日本におけるアダム・スミスの原典ならびにその他の諸版本 1759-1900」『社会思想』3巻1号 社会思想社(1973年4月)
- 3) 田中敏弘「河上 肇と『国富論』」『KG Today(関学通信)』17号(1973年6月)[田中敏弘『アダム・スミスの周辺 経済思想史研究余摘』日本経済評論社(1985年2月)に再録]
- 4) 守矢 洋「スミス『国富論』初版の二つの異本について」『経済学雑誌』69巻5号 大阪市立大学経済学研究会 日本評論社(1973年11月)

- 5) 田中敏弘「『国富論』初版本と河上 肇博士の感想二章」『母校通信』51号(1974年4月)[田中敏弘『アダム・スミスの周辺 経済思想史研究余摘』日本経済評論社(1985年2月)に再録]
- 6) 宮本又次「河上謹一と河上 肇」『学会会報』第748号 学会(1980年7月)[宮本又次『先学追慕』思文閣出版(1982年12月)に再録]
- 7) 伊東光晴「本学の Adam Smith Collection について」『図書館の本 千葉大学附属図書館報』No.21.千葉大学附属図書館(1982年3月)
- 8) 松田 博「マルクス『資本論』初版の機関所蔵について 第16回西洋古典籍研究会報告(未定稿) 於:近畿大学(1993年1月23日)
- 9) 田中敏弘「特別展示資料紹介 アダム・スミス著作文庫を中心に」『経済学の成立 第3回大学図書館特別展示学術資料講演会』関西学院図書館(1993年10月)
- 10) 大村 泉「東北大学附属図書館所蔵マルクス/エンゲルス貴重書の周辺(下)」『木道子 東北大学附属図書館報』22巻1号(通巻78号) 東北大学附属図書館(1997年6月30日)[大村 泉『新MEGAと《資本論》の成立』八朔社(1998年4月)に再録]

これら所蔵目録や関連文献をとおしてみると、『国富論』はマルクスの『資本論』と並び現在では国内の多くの機関で所蔵されており、その数は合計で39機関、52部にのぼる。このあたりの事情については「東北大学附属図書館所蔵マルクス/エンゲルス貴重書の周辺(下)」(2)が参考になるが、所蔵機関については提供した資料の読み違いが見られるので訂正をおこない、またその後の調査により、新たに確認のできた金沢工業大学及び山崎怜先生のご指摘により確認のできた関東学院大学の2大学2部を加え、天理大学については2部から1部の所蔵に訂正し、以下に示しておく。

北海道大学、小樽商科大学、東北大学、一橋大学(6部)、東京経済大学(2部)、東京大学経済

学部、放送大学、慶応義塾大学(3部)、早稲田大学、法政大学大原社会問題研究所、中央大学、専修大学、日本大学(2部)、成城大学、明星大学(2部)、関東学院大学、名古屋大学経済学部(2部)、名古屋商科大学、金沢工業大学、京都大学経済学部(2部)、京都大学法学部、京都外国語大学、天理大学、大阪大学、大阪府立中央図書館、大阪市立大学、関西大学、近畿大学、大阪商業大学、阪南大学、大阪学院大学、神戸大学、神戸商科大学、関西学院大学(2部)、福山大学、広島経済大学、松山大学、九州大学、長崎大学。

その後“京都大学に入った”(これは、谷村が藤本ビルブローカー銀行を退く際、退職記念品として「日富論」を祈願したというエピソードと谷村蔵書が京都大学に入ったということの混

同、思い違いに基づく記録のようである)とされる藤本ビルブローカー銀行調査部所蔵のデュガルド・スチュアート旧蔵本は、京都大学にはなく、一体どこに入ったのであろうか。

展示会を起点の話が広がりすぎたが、以上を紹介しておきたい。

1: 笹本 光代「谷村文庫」『静脩』

Vol.20. No.1.(1983年10月)

2: 大村 泉「東北大学附属図書館所蔵マルクス/エンゲルス貴重書の周辺(下)」『木這子—東北大学附属図書館報—』22巻1号(通巻78号)
東北大学附属図書館(1997年6月30日)

(まつだ ひろし)

附属図書館百周年 自立・共同・発展のイニシアチブ 京都大学図書館システムの新展開へ

附属図書館情報サービス課図書館専門員 澤 居 紀 充

二つの要請

明治維新、戦後改革に次ぐ第3の改革といわれる「行政改革」は、経済、金融、社会保障、財政、教育、行政の6つの分野におよび、国立大学と大学図書館の存立基盤を大きく変えようとしている。これが大学における教育と研究、大学図書館の発展となるかどうか。少なくとも今現れている予算の削減または「重点配分」と定員の大幅削減という動きをみると、大学図書館受難の時代といっても過言ではない。

このいわば「難局」を切り抜けるためにさまざまな課題が提起され、従来の大学行政からみると、相当大胆な改革も行われようとしている。

他方、大学図書館に対する利用者の要求も強まり、情報と文献の入手における国際的な水準からの遅れを日常的に体験した利用者からは、怒りの声も図書館にぶつけられて来ている。こ

れは大学内外における教育と研究、生涯教育などの深化・拡大にもとづくものであろう。

これら二つの要請に対して、われわれ図書館と図書館職員はどんな態度をとればよいのだろうか。

利用者の要求と図書館の発展

われわれの基本的態度は以下のようでありたい。すなわち利用者とともに利用者の要求実現へ努力すること。利用者の要求を身勝手なものとしてだけ見たり、感情的なものとして排したりせず、図書館職員の専門性を発揮して、その要求実現の方途を考えなければならないと思う。当面の困難な諸条件にひるんで、その実現を初めからあきらめていては、図書館の存立の基盤そのものを掘り崩すことになる。そして利用者の要求は発展し、それに積極的に応える努力を通じて図書館も発展する。

自立・共同・発展のイニシアチブ

「調整された分散方式」というのが、長らく京都大学における図書館システムを特徴づける言葉であった。しかし、実際は、「調整なき分散」であったり、それを危惧して発動される「調整という名の強制」であったのではなかろうか。現在のような大学や大学図書館受難の時代においては、この両極端をブレ動いては、危機に対処できない。

「自立と共同のネットワーク」に結合され、「発展のイニシアチブ」を民主的に形成し得る図書館システムを生み出すために、全学的に「図書館力」を発揮して展望を切り開かなければならない。

この場合、自立というのは、今日の大学に求められる基本的図書館サービスやシステム管理を自力で可能とする単位を形成することであり、ネットワークとは、それらが共同して、一層高度な図書館機能を発揮することである。そしてこのようなシステムを生み出すためには、「調整」だけでは不可能であり、明確な発展のイニシアチブの存在が不可欠である。

全学的に取り組む条件の形成

全学的な図書館システムについて、その改善の指針を考えると、「分散（部局自治）を「調整」する附属図書館の役割を強調するだけでは、よい解決は得られない。以下のように、現在において生まれ、形成されつつある全学的な共同の条件や積極的要素を生かすことが重要である。

図書系事務連絡会議

この会議は、従来の掛長会議を拡大し、全図書館（室）が参加するコミュニケーションと協力の場として1998年4月に発足した。今後は、情報公開を基礎に、運営に工夫を加え、自立と共同の精神で図書館発展のイニシアチブを形成していく。

図書事務改善検討部会

事務機構改善検討委員会として大学全体の方針と体制がすでに存在し、ここでは図書館以外

の他の業務や職種とのかかわりのある問題についても、提起し、改善にとりくむことが可能となっている。図書部門の事務改善検討部会は、1999年3月に第1回会議を開き、具体的課題の検討を始め、その後構成員を拡大し、WGを設置、個別課題での公開研究会もおこなっている。

新業務システムの導入

図書館職員の2割を結集するワーキンググループが1997年5月に発足し、新業務システム導入に大きな役割を果たした。

個々の業務システムやそれを準備・運用する過程（職員連絡用ホームページやメーリングリストなど）で、自主性や創意性が存分に発揮された。

人間的にも、技術的にも図書室間のネットワークが形成・強化され、その中で附属図書館は事務局としての役割を担っている。

ここで実現された全職場的な協力共同を広げ、次期システムの準備を開始する。

自己分析と外部評価から改善の指針へ

全学的な「図書館力」発揮のために、京都大学附属図書館創立百周年記念事業の一つとして、昨年来進められてきた外部評価が重要である。

利用者アンケート（1999年7月）『附属図書館利用者アンケートQ & A』（同11月）『京都大学図書館システム - 現状と課題 -』（『附属図書館編』同11月、『部局図書館・室編』2000年1月）外部評価（1999年11月、2000年1月）と積み重ねられ、諸資料とともに2000年3月に、集大成される。

以上のような自己分析と外部評価の上に、本格的な図書館改善の指針を確立するための活動が新たに組織されなければならないと思う。

最後に一言すれば、この図書館改善の指針の中心となるべき問題は、「情報と文献の検索と入手」に尽きる。そのために「全学的な情報と文献の収集と保存・検索・請求・搬送・清算システムの再編成」や図書館財政の確立、人員配置と研修などが重要となる。

（さわい としみつ）

オランダの大学図書館事情

附属図書館情報サービス課相互利用掛長 鈴木 敬 二

1. はじめに

文部省短期在外研究員として、3ヶ月にわたってオランダとイギリスに滞在して、ヨーロッパにおける電子図書館活動の調査・研究をする機会を得ました。本報告では、日本ではあまり馴染みのないオランダの大学図書館事情について紹介します。

2. オランダの高等教育機関と図書館

オランダには国立・私立合わせて13の大学と上級職業学校(Hogescholen)と呼ばれる機関が59あります。学生数は、2対3の割合で後者が多く、合わせると人口換算で日本とほぼ同程度の数となります。両者はいずれも大学レベルの教育が行なわれていますが、大学はより幅広い視野で学問を修めることが目的であり、上級職業学校ではより実務に即した教育が行なわれているという違いがあります。ちなみに、図書館員の養成は、上級職業学校で行なわれており、全国に6校あります。

図書館についてみると、蔵書総数は大学の約1,600万冊に対して上級職業学校が300万冊、購入雑誌数では150,000タイトルの大学に対してと上級職業学校では32,000タイトルと大きな差があり、学術図書館としては大学図書館が中核的な存在となっています。学術図書館としては、別に200万冊、15,000タイトルを擁する国立図書館があります。工科大学や農科大学の図書館では、研究者や学生へのサービスを行なう他、その分野の国家的情報センターとしての役割も

果たしています。

3. 大学図書館の特徴

オランダの大学図書館の特徴を、筆者がお世話になったライデン大学の例を交じえて、いくつか紹介します。

3.1 構成

まず、図書館は中央館と複数の部局図書館から構成されているのが特徴です。訪問した8大学のうち図書館が中央館1館のみであったのはティルブルグ大学だけでした。また、歴史のある古い大学では、大学の施設が一つのキャンパスを形成せず、街中に散



ライデン大学図書館

在しているケースが多いようでした。

ライデン大学は1575年創立のオランダ最古の大学で、現在では神学部、法学部、医学部、数学及び自然科学部、芸術学部、社会科学部、哲学部、考古学部の8学部を擁する

総合大学で、学生数はおよそ15,000人です。大学はライデン駅に隣接していて、線路を挟んで西側には附属病院、医学部、社会科学部、自然科学部などがあり、東側にはその他の学部の建物が散在しています。図書館は、東地区の運河沿いにある中央館と4つの部局図書館、複数の学科・研究所図書室で構成されています。全合わせて270万の図書と180万冊の製本雑誌を所蔵し、15,000タイトルの雑誌を受け入れています。

3.2 閉架式

次の特徴は、どの大学図書館もほとんどの資

料が閉架式であることです。ライデン大学中央図書館でも、閲覧室に備えつけられた参考図書や基本図書及び新着雑誌(これらは貸出が不可)を除き、90%以上の資料が閉架式です。地下の書庫には出納専門の職員がいて、利用者はいっさい入れません。そのため、以下のような特徴が見られます。

(1) 資料の依頼から貸出までのシステム化

利用者は資料の依頼をOPACから行います。カウンターで請求することもできますが、この場合も職員がOPACを引いて依頼をしていました。依頼された情報は地下の数ヶ所に設けられたプリントステーションのうち、一番排架先に近いステーションに自動的に出力され、出納専門職員により書架から取り出され、自動搬送機によりカウンターに搬送されます。利用者は依頼から30分後にカウンターに出向くと資料が届いているというシステムになっています。

(2) 書架の効率的な利用

利用者によるブラウジングがないため、開架式のように分野別に並べる必要がありません。ライデン大学では、図書の場合、まず大きさで大中小の3区分をした後、区分内は、受入順に並べていました。当然、書架の途中の増加分を考慮する必要がないため、書架スペースを最大限に使うことができます。また、請求記号は、「書架番号 + 棚番号 + 棚内の位置」からなり、配架場所が機械的にわかるので、迅速な出納が可能になっています。

(3) 詳細な分類目録

ライデン大学では6分冊からなる詳細な独自分類表を用いて、分類目録を作成しています。これにより、ブラウジング機能がない閉架式の資料に、主題からのアプローチができるようになっていきます。

3.3 相互利用と一般公開

3番目の特徴は、図書館間の相互利用及び一般市民への公開が進んでいることです。大学の構成員なら、自分の所属する大学図書館だけでなく、どの大学の図書館でも利用証を無料で作成することができ、閲覧はもちろん貸出も可能です。一般市民にも広く公開されていて、閲覧だけでなく無料で、貸出や学習用コンピュータの利用も利用料を払うことにより可能としている大学が多いようです。ライデン大学の場合は、貸出を受けるためには30ギルダー(約1,500円程度)の年間利用料が必要ですが、館内利用は全く自由で、閉架の資料を請求するための利用証は無料で入手することができます。もっとも、オランダでは公共図書館が非常に発達しているので、一般市民は公共図書館を利用することが多いためか、大学図書館の利用はそれほど多くはないようでした。

3.4 組織

図書館の組織上の特徴としては、(1)図書館長が図書館員であること、(2)各専門分野毎にレファレンスライブラリアンが存在すること、(3)特殊コレクションの担当者は教育・研究にもたずさわるなど、図書館員のステータスが高いことが、まずあげられます。また、国立大学でも図書館員の採用は、ポストに対して行なわれるため、日本のような人事異動がありません。ライデン大学だけかもしれませんが、目録関係が書誌作成、分類・件名付与及び目録チェックと3つの係で行なわれており、めずらしく思いました。また、言語毎に専門家が採用されていることがうやましく思いました。

4. オランダにおける電子図書館活動

オランダの電子図書館活動で特徴的なことは、全国レベルの所在目録が存在し、それを利用したILLシステムが整備されていることです。そして素晴らしいことに、全ての大学で遡及入力がほぼ完了しており、ILLシステムには会計処理が組み込まれています。

所在目録を作成する書誌ユーティリティはPicaにより提供されています。Picaは1969年に5つの大学図書館と国立図書館が目録の機械化のためにコンソーシアムを組んだことに始まり、現在では非営利の私企業となっています。Picaは日本の学術情報センターより6年早く、1979年にオンライン分担方式による目録作成システムのサービスを提供し、総合目録の構築を開始しました。現在では、全ての大学図書館を含む400以上の図書館が参加し、総合目録の登録件数は図書が約1,000万書誌と雑誌が35万タイトルとなっています。

大学図書館においては10年程前から遡及入力が始まり、現在ではほとんどの大学で完了しています。ライデン大学では、1983年に「A-Z project」と呼ぶ10名体制のプロジェクトを立ちあげ、約270万冊の図書の遡及が1999年中にほぼ終了するとのことでした。プロジェクトの推進経費の70%は国から通常経費とは別に支給されたそうですが、その目的は学術情報の流通の促進と共に、雇用の創設という側面も大きかったとのこと。ライデン大学では、まったくの図書館素人を採用し2ヶ月間の教育試用期間を経て、適性が認められた者を本採用して入力にあたったとのこと。

ILLシステムの特徴は、依頼先がシステムで自動的に割り振られることと、各図書館で1日の処理件数の上限を設定できることがあげられます。また、利用者には所属する図書館で利用料金を預託することによりILL依頼用のアカウントが発行されます。このアカウントにより、OPACやPicaが提供する各種データベースから利用者が直接ILLの依頼をすることが可能です。しかも、複写された文献は図書館を通さず直接自宅に送付されますので、利用者にとっても図

書館員にとっても非常に便利なシステムと言えます。なお、職員が操作するシステムとは異なり、依頼先を指定することが可能です。さらに、あらかじめ所蔵先の図書館の平均処理時間が表示され、依頼館選択の参考にすることができるなど、きめの細かいシステムとなっています。利用料金は預託金から自動的に引き落とされ、不足の場合は依頼ができない仕組みになっています。もちろん、利用者はいつでも何回でも追加の預託金を預けることができます。図書館間の料金決裁は、4半期毎に相殺処理により行なわれています。

このシステムにより、利用者は既存の紙媒体の資料は全てOPACで検索することができ、



デルフト工科大学図書館

ILL依頼により複写物を迅速に入手することが可能となっています。その上で、CD-ROMや電子ジャーナルなどの電子的な資料についても、全ての大学図書館で大規模に導入され、利用に供されています。現在は、これらの紙媒体や多様な電子媒

体の資料を統一的なインターフェースで簡単に利用できるようにシステムが検討されており、PicaによるPiCartaなど一部実用段階に入ったシステムが登場してきています。

5. 最後に

オランダの大学ではほとんどの図書館に喫茶室がありました。オランダ人はコーヒーが大好きで、一日に何杯も飲むのですが、職場には給湯室のようなものはなく、喫茶室に行っては飲んでいました。特に、10時と3時の休憩には皆が集まり、コミュニケーションの場として利用されていました。もちろん、利用者也飲食や友人との会話の場として大いに利用します。このような場があるため、館内ではほとんど飲食は見られず、また話し声も聞こえず、静かで落ち

着いた図書館の雰囲気が残っていました。京都大学附属図書館にもぜひ欲しい施設の一つだと思います。

最後に、3ヶ月間留守をしてご迷惑をおかけした情報サービス課の皆さんに、また、在外研

究員実現のためにご尽力いただいた関係者の皆さんに深く感謝いたします。ありがとうございました。

(すずき けいじ)

「英国図書館の未来とイギリスにおける大学図書館の発展」

リチャード・ローマン氏講演要旨

はじめに

1999年5月21日、英国図書館(The British Library)のリチャード・ローマン氏(Mr. Richard Roman)による講演「英国図書館の未来とイギリスにおける大学図書館の発展」が行われた。これは、1999年度第1回近畿地区国立大学図書館協議会講演会のひとつとして行われたもので、本稿はその要旨である。

1. 英国図書館の役割

英国図書館はイギリスの国立図書館であり、ふたつの基本的な役割を担っている。ひとつは、他の伝統的な図書館と同じように、閲覧室を通じてすべての資料にアクセスできるようにする役割である。そしてもうひとつは、地理的に遠く離れた利用者へも英国図書館のコレクションを提供するという役割である。英国図書館では、前者をダイレクト・サービス、後者をリモート・サービスとして、明確に位置付けている。

2. ダイレクト・サービス

1997年11月、ロンドンのセント・パンクラスに、英国図書館新館が開館された。新館の完成により、15箇所 に点在していた英国図書館のコレクションを、1箇所 にまとめることができ、

利用者へのより快適な環境を提供している。大英博物館から引き継がれた遺産から、特許、最新科学技術論文など幅広い資料を、機能的に一括して収蔵することにより、求められる資料をより早く提供し、より充実したレファレンス・サービスを行えるようになった。この新館設立により、ダイレクト・サービスの更なる向上が期待されている。

3. リモート・サービス

英国図書館のもうひとつの基本的役割であるリモート・サービスは、地理的に遠く離れたところへ英国図書館の資料を提供することをその第一の目的としているが、このサービスは、「ドキュメント・デリバリ・サービス」と「資料のデジタル化」を中心に成り立っている。

A ドキュメント・デリバリ・サービス

英国図書館におけるドキュメント・デリバリ・サービスは、30年にわたってイギリスの図書館協力や文献提供の基礎となり、今や世界中に文献を提供するまでに至っている。現在、世界各国から月に2万件以上の文献複写のリクエストを受け付けており、日本からも約1000機関が、日常的に英国図書館のドキュメント・デリ

バリ・サービスを利用している。

'inside Web'は、このサービスをより快適に提供するために開発されたシステムである。データベース検索サービスとドキュメント・デリバリ・サービスを統合し、Webベースで提供するサービスであり、京都大学でも工学部、工学研究科、情報学研究科、エネルギー科学研究科で、このサービスが利用されている。

学術雑誌の年間購読料高騰は世界的規模で問題になっており、図書館でもこれまで構築してきたコレクションを見なおさざるを得ない段階にきている。ここで英国図書館は、「'JUST IN CASE'と'JUST IN TIME'のバランス」という考え方を提唱していきたいと考えている。あらかじめ利用者のニーズが具体的に生じる前に所蔵しておく資料と、利用者のニーズが生じてから取り寄せる資料とのバランス、いいかえれば、「所蔵」と「アクセス」のバランスである。'inside Web'では、この「アクセス」という分野で、よりよいサービスを提供するために、更なる開発が進められている。現在、リクエストされた文献は郵便およびFAXで提供されているが、近い将来、電子的媒体でも提供する予定である。

B 資料のデジタル化

英国図書館におけるリモート・サービスのもうひとつの柱である「資料のデジタル化」は、1994年より行われた、英国図書館のコレクションの利用を最大限に引き出すことを目的に電子的手段をいかに効果的に使うかという実験・Initiatives for Access - がその始まりといえる。1996年には電子図書館プロジェクトが開始され、さまざまな資料デジタル化プロジェクトが実施されている。「国際敦煌学プロジェクト(The International Dunhuang Project)」「ベオウルフ(Beowulf)」「ターニング・ページ(Turning the Pages)」は、その中でも中心的なプロジェクトである。

1900年に、敦煌の石窟から経典写本、巻物、図

版などが大量に発見され、敦煌学という学問体系が樹立された。約20年にわたり20000点あまりが発掘され、最も古い巻物は9世紀に遡ることできるといわれる。この主なコレクションは、英国図書館、北京図書館、セントピーターズバーグ東洋学研究所、フランス国立図書館に所蔵されることとなり、小さなコレクションは世界各国に分散している。貴重な資料であるにもかかわらず、完全な目録がないこと、閲覧するには資料が脆すぎることで、利用基準をもたない所蔵機関があることなどの理由が、その研究に支障をきたしている。「国際敦煌学プロジェクト」は、これらの分散したコレクションをデジタル化することによって疑似統括し、アクセシビリティの向上を目的とした国際プロジェクトである。英国図書館所蔵1000写本はすでにデジタル化されており、次段階として、北京図書館所蔵分がデジタル化される予定である。英語のデータベースと中国語のデータベースを現在開発中である。

「ベオウルフ」は有名な古英詩であり、英国図書館で所蔵されている中世写本が唯一現存している。詩は、スカンジナビア・イェアト族の英雄ベオウルフの偉業を物語ったものである。この古写本は数度の火災で破損しており、脆くなった羊皮紙を守るため、紙の台紙に乗せられている。様々な条件の下、超高解像度カラーキャンニングカメラで撮影することにより、汚損により読めなくなっていた文字を浮き上がらせることに成功した。キールナン教授はこの最新科学技術を駆使した分析により、ベオウルフはバイキングによって語り継がれたものであるという通説をくつがえし、カヌート王朝時代に創作されたものであるという新説をうちたてることができた。更にデジタル化されたことによって、資料の保存の一助となったこと、国際的アクセスが可能になったこと、資料の拡大が可能になったことなどその恩恵は、はかりしれない。

「ターニング・ページ」は、学術的目的とい

うより、一般に英国図書館の貴重書を公開しようという試みのもとに開発されたシステムである。英国図書館新館の展示室に設置されているモニターを指で触れると、あたかも現実の本をめくるように資料を閲覧できる。現在四種の貴重書がデジタル化され、公開されている。

このように、英国図書館では世界でもっともアクセスしやすい国立図書館として、日々進化している。これからも、利用者の立場にたったサービスの改善を行うつもりである。今日の講

演を機に、日本の皆様のご意見をいただければ幸いである。

おわりに

今回、通訳としてこの講演に参加することができた。講演の内容はもとより、私にとって通訳そのものが貴重な経験であった。このような機会を与えて下さった皆様に感謝の意を表します。

(附属図書館情報管理課受入掛 呑海さおり)

京都大学経済学部創立80周年記念古典文献展示会開催報告

経済学研究科では京都大学経済学部同窓会との共催により、平成11年10月1日(金)から10月5日(火)まで、附属図書館3階で京都大学経済学部創立80周年記念古典文献展示会を開催しました。学内外から645名の入場者がありました。入場者の皆さんからは資料に対する思い、生の声を聴くことができました。(アンケート集計結果については、経済学部図書室のホームページにて報告の予定です。)教官・院生・図書室職員が図録作成・展示会場設営・展示説明会開催と共同作業できましたことも、うれしい思い出です。展示会を支えていただいた各方面の皆様に厚く御礼申し上げます。以下は展示に携わった院生の感想です。

(経済学部整理掛長 菅 修一)

「古典文献展示会」開催をお手伝いし、10月1日から5日まで開催された、経済学部創立80周年記念の古典文献展示会は、まだ厳しい残暑の中にあつたにも関わらず、多数の入場者に恵まれました。経済学の歴史を静かに語ってくれる、淡い色彩の洋古書の展示を第1部、明治初期までの日本の姿を生き生きと見せてくれる、多彩な和古書の展示を第2部とした、少々変わ

った、対照的とも言えるような編成の展示会であつたかも知れませんが、広い分野の方々に、どちらも負けず劣らず興味を持って見て頂けたことを、心からうれしく、光栄に思いました。有難うございました。私も、もとより、まだまだ勉強不足の身ではありますが、第1部「経済学の系譜」について、展示文献の選考、図録の作成、当日の案内および洋古書に関する解説をお手伝いする機会を与えて頂きました。専攻上、洋古書に触れる機会はこれまでも比較的多かつたとはいえ、これほど大量の、稀少度の高い文献に、しかも体系的に触れることができたということは、極めて触発的な、得難い体験でした。経済学における古典文献は、経済学史における里程碑としてだけでなく、個々の経済学者、経済思想家の思考の軌跡を見るに当たっても、研究上、極めて貴重な資料です。今回ご覧頂けたものはその中の一部に過ぎませんが、大量の古典籍の蓄積を前にして、改めて先学に感謝するとともに、有効な活用、さらには将来への継承と発展のお役に立つことの出来るよう、微力ながらも、努力しようという決意を新たにしました。

末筆ながら、残暑の中をご来場くださった皆

様方、ご指導頂いた諸先生方および経済学部図書室・附属図書館の皆様方に、心から御礼申し上げます。有難うございました。

(経済学研究科博士課程：嘉陽英朗)



展示説明をする大学院生

「古典文献展示会」開催に携わって

今年は経済学部80周年ということで記念に貴重図書の展示をすることになり、そのお手伝いをする機会に恵まれました。おかげさまでたくさんの方々に見ていただくことができ、個人的には非常によい展示会になったと思います(自画自賛ではなく)。

めったに手に取ることのない貴重書に実際に触れることができるのは僕自身とても興味深い体験でしたが、学問的な価値よりもその金銭的な価値にどうしても興味がいつてしまうのは浅学非才の身のあさましさでしょうか。(一冊でも正直、僕なんかバイトしたくらいではとても追いつかないような金額だったりするので。)

まあそんなことはさておき、何よりも特筆すべきは菅さんをはじめとする経済学部図書室のスタッフの方々のご尽力でしょう。われわれ大学院生は2、3日集まって小さな原稿を一人頭十数個書いたに過ぎませんが(それ以外、原稿の半分くらいはわれわれの指導教授の田中先生がお書きになったものです)、実際のパネル作り、レイアウト、会場のセッティング等にかかった時間と手間はかなりのものだと思われ、僕などはただただ頭の下がる思いでした。

それだけに、予想以上にお客さんが来られてスタッフの皆さんが受付に追われながらもうれしそうな顔をされているのが印象的でこの企画にかかわることができてよかったと感じました。また、どう考えても日頃あまり社会科学系の古典文献に縁のなさそうな医学部、農学部、工学部といった学部からも多数来場者があり、解説の簡潔さに多少戸惑いながらも熱心に展示に見入っている姿が個人的には非常にうれしかったです。

今回の作業を通じて、数百年の時を超えて偉大な思想家達の内奥にすこしでも近づけたような感じがしたのですが、その気分の新鮮さを出るだけ失わないようにするのが、展示会からもう結構日数の流れた今日この頃の僕自身の課題だったりするのです。(やれやれ・・・)

なにはともあれ、ご来場の皆さん、そしてお世話さまにもこの文章を読んでくださった皆さん、どうもありがとうございました。

(経済学研究科博士課程：太子堂正弥)

「古典文献展示会」のお手伝いをして

今年は経済学部創立80周年ということで記念の古典文献展示会が開催され、私もお手伝いする機会があり、図録の作成と当日の受付の手伝いをしました。図録の作成に関しては第1部「経済学の系譜」の解説の手伝いをしましたが、多くの貴重な古典に実際に触れる機会があり、非常に得がたい経験をすることができました。経済学の草創期から現代にまで及ぶ文献をまとめてみることができ、ありきたりな言い方ですが歴史の重みに耐えてきた古典の力を実感しました。

また当日受付をしていた時も予想以上の多くの方々にお越しいただき、大変嬉しく思いました。一つの文献の前にじっと立ち止まって見ている方や、学生時代の思い出を話される方、また特に第2部の『文久三年記』の紹介記事が新聞に掲載されていたということで、新聞の切抜きを持って受付に来られる方が多かったのが

印象的でした。

そして特に個人的に嬉しかったのは、普段あまり接することのない経済学部図書室の職員の方々と御一緒できたことでした。特に整理掛の皆さんとはいつもは本を間に挟んで「顔の見えない」関係でしたので、そのような方々とお話することができたのは楽しかったです。

今回の展示会をお手伝いすることで感化させ

られることが多く、貴重な文献が多くあることと共に、そのような環境の中で研究ができることのすばらしさを再認識しました。このような機会を与えてくださった田中秀夫先生、図書室の関係者の方々、来場者の皆さんに御礼申し上げます。

(経済学研究科修士課程：川名雄一郎)

「工学部等文献収集講座 工学情報をgetしよう！」について

企画メンバー

由本慶子・江上敏哲・慈道佐代子

1. 工学部等文献収集講座とは

平成11年10月5日、12日午後、2回にわたり工学部等図書事務連絡会議主催の「工学部等文献収集講座 工学情報をgetしよう！」(以下get講座)が開催された。工学部・情報学研究科・エネルギー科学研究科の各図書室職員は、工学部等図書事務連絡会議を毎月1回程度開催し業務に関する連絡や調整等を行っているが、昨年の3月に行われた会議上でこの講座の提案がなされ、その後工学部等図書職員一同が開催に向けて準備を開始した。

このget講座は、学部学生から院生、教官、職員まであらゆる層の利用者を対象に、工学系文献の収集方法や図書館(室)の使い方などについて講演形式で解説したものである。この講座を行うことにより、「今図書館(室)で何がどこまでできるのか、どこまで応えることができるのかを利用者に広報する」「利用者にどんな人が工学部等の図書室で働いているのかを知ってもらう」「図書職員がマイクを持ち、人前で話す経験をする。また各図書室で行っているオリエンテーションに役立てる」ことを目的として取り組んだ。

利用者が何を求めているのか、実際にカウンターで応対していても実に様々である。1回生対象なら、14ある工学部等図書室の場所や京大

のOPACの使い方からはじまり、院生対象になるとそれぞれの専門分野でよく使用するデータベースの検索の仕方・コツなど、ある程度対象を絞れば講座の内容も自ずから決まってくるように思う。が、今回はあえてget講座全体としての対象を絞らないことにした。工学系情報の文献収集法を中心に、その他多岐にわたる項目について、担当者が1項目あたり10分から20分程度概説を説明する方針にした。各項目の時間の少なさおよび広く浅く紹介する内容については、図書事務連絡会議でも意見が出て議論された所であった。議論を重ねる中で私たちは、情報探索方法を広く紹介することが始まりであり、当然予想される内容の詳細を知りたいという要求や出てくる疑問に対しては、get講座後のおおのの図書室での実際のサービスでカバーしていく事を確認し合った。いわばイベントとしてだけget講座を位置づけるのではなく、通常行っている私たち図書室のサービスの一環に、このget講座を取り込もうとする考え方から出発している。

実際のget講座のプログラム内容は、工学部の図書館事情、電子ジャーナルの利用、学位論文や特許資料の探し方など工学系利用者の興味を引きそうな内容、図書館(室)利用の初心者から院生教官にも役に立つ幅広い内容をそろ

え、2項目お二人の工学研究科教官を講師として招いた他は企画・冊子資料作成・講演等すべてを図書職員が主体的に行った。

また、あらかじめget講座への質問・要望等を掘り起こし、当日に反映させることも目的とした。

図書室から研究室に発信する広報ルートだけでは、学部学生への広報は不十分であると言わ

ざる得ない。私たちが一番get講座に参加してもらいたいと思っていた「いままで図書館（室）を利用したことがない学部学生さん」については、図書室にポスターを貼っても、見る機会がないのではないかと思われた。この層への広報をどうするかは一番頭を悩ませたが、get講座前2週間程度、学部の1・2・3回生が参加する授業の開始前・終了後を狙い、get講座各項目の紹介文を書いた文献収集講座ニュース誌を配布することにした。それに加え、get講座当日の昼休みには、本部生協食堂出入り口付近で食事をしにきた方々に案内を配布した。

3. 講座当日の様子・参加者の反応
広報活動が順調だったことと、会場の工学部8号館共同第2講義室は、工学部等の構成員にはよく知られており、生協食堂の上という立地条件も味方して、get講座当日

2. 当日までの準備

当日までの準備で、一番力を入れたことは、get講座の広報・PRであった。今回のような試みは工学部でははじめてでもあったことから、掛長を含む職員3人で企画メンバーを作り、準備・広報・調整を主に担当した。ポスター、ホームページでの宣伝の他「文献収集講座ニュース誌」を開催前4回発行し、掲示プラス各図書室から研究室へ配布し閲覧してもらうなど周知に力を入れた。この文献収集講座ニュース誌はPRだけでなく読み物としても成り立つよう教官にも原稿を書いて頂き興味を引くことを心がけた。

は2日とも100名以上、延べ約250人の参加者が集まり、あらかじめ用意した資料冊子が足りなくなるといううれしい誤算も起こった。8割方埋まっている席からの熱気もあり、10月とは思えないほど会場は暑く、参加者の図書館（室）や文献情報収集に対する感心の高さが伺えたように思う。

講演する職員はそれぞれ事前リハーサルを経て本番のマイクを手にしたが、大きなトラブルもなくget講座は終了した。配布された冊子には、アンケート用紙を挟んでおり、終了後集計し、分析等ができるようにした。アンケート用

平成11年度工学部文献収集講座

工学情報をgetしよう

開催日 (2回実施いたします。両日とも同じ内容です。)
10月 5日(火) 10月12日(火)
会場 : 工学部8号館2階共同第2講義室

★プログラム★		★開催時間★	
挨拶 吉田副学長・図書室長・工学研究科図書委員長		午後	1:00-1:05
工学部の図書室事情			1:05-1:20
図書・雑誌を探す			1:20-1:40
インターネット情報の活用			1:40-1:55
電子ジャーナルの利用			1:55-2:15
雑誌論文を探す			2:15-2:30
イギリスの図書館サービス (休憩)			2:30-2:45 2:45-3:00
Chemical Abstractsを使いこなす 本谷島田教授(合成・生物化学)			3:00-3:30
学位論文を探す			3:30-3:40
レポートを探す			3:40-3:50
特許資料を探す			3:50-4:00
新聞記事を探す			4:00-4:10
CD-ROMサーバーで提供されている資料の 紹介と使い方			4:10-4:25
私の文献収集法 吉田工学研究科図書委員長(分子工学)			4:25-4:45
終わりに 図書事務部長			4:45-4:50

主催：工学部等図書事務連絡会議

紙には、質問があれば各図書室あるいはget講座後の文献収集講座ニュース誌等で責任を持って回答する旨記して、図書室側の姿勢を利用者にアピールするようつとめた。

4. アンケートから浮かび上がってきたこと

アンケートの回収数は延べ100あまり、回収率はまずまずだった。参加者が今回のget講座をどのようにとらえたか、アンケートからも浮きぼりにされている。内容については、おおむね良い評価が多かったようである。資料の冊子も、get講座終了後も各図書室においてもらいたいなどの要望がたくさんあった。この冊子は今後改訂を行い、来年度の学部、各専攻の新入生オリエンテーションで配布する予定になっている。

しかし、その反面相当数の批判意見も頂いた。その中には、次回行うとしたらすぐに検討改善が可能なものから、内容・難易度についての意見では、利用者の数だけ要求があるといっても過言ではないという印象を受けたものもある。また、今回のような講演形式ではなく、小人数の演習方式を望む声も少なからずあり、それこそ通常私たちが行っている業務の中でフォローしていかなければならないものもあるのではないかと思った。

また、頂いたアンケート中の質問については、内容によりget講座終了後発行した文献収集講

座ニュース誌に回答を掲載したり、担当図書室職員が個別に質問者に連絡し回答を行った。

5. 終わりに

なにぶん工学部・情報学研究科・エネルギー科学研究科では、はじめての試みで戸惑うことも多々あった反面、前例にとらわれず文献収集講座ニュース誌の発行やビラ配りなど、試みることができた。普段図書室を利用している層以外の層にも図書館（室）というものの存在や、私たちが行っているサービスをアピールできたのではないかと思う。私はこの4月から開室したエネルギー科学研究科の図書室で業務を行っているが、ここでは実に多岐にわたる分野の情報を駆使し、複合的領域の研究を行っている。が、カウンターで対応している限りでは修士くらいまでの学生ならば、個人で意欲的に取り組まない限り、新しい情報収集法などがあまり伝わっていないことも感じていた。メールで新しいサービスの情報を流しても、利用者の記憶にはあまり残らないことも多い。また疑問を持っている利用者が全て直接職員に聞いてもらえるとは限らない。その意味で今回の文献収集講座は、私自身、手薄になりがちな分野のサービスを補う意味で、とても良い機会だったように思うのである。

(ゆもとけいこ、えがみとしのり、じどうさよこ)

新入生オリエンテーションのご案内

今年ももうじき桜咲く華やかな季節を迎えます。キャンパスにもフレッシュな新入生を迎え、新たな1年がスタートしようとしています。さて、毎年恒例となりました新入生オリエンテーションを下記の日程で開催します。図書館の建物内の設備や利用の仕方をお知らせし、キャンパスライフにおおいに活用していただきたいと願っております。同じ内容で5回開催しますので、都合のよい日にご参加ください。

日時：4月24日(月)～28日(金)12:10～12:45

場所：附属図書館3階AVホール

内容：1.附属図書館のサービスと設備のご案内

2. カード目録とOPAC*について

オプション

希望される方に、終了後約15分ほど1階のOPAC端末で実習を行います。

*OPAC：学内所蔵の図書や雑誌を検索するシステム

大学図書館職員長期研修に参加して

工学部建築系図書室 中村 節子

平成11年7月11日から30日までの3週間、長期研修に参加した。以下はその参加までの経緯と感想である。

あれは確か5月の半ばのことだった。とある先輩から私に、研修への参加を勧める電話がかかった。しかし、その時点での私は研修など到底無理と思い込んでいたので、「まず家族のこともあるし、3週間も家を空けるのは無理です。」と思わず答えたが、「そう言わず一度考えてみたら。それだけの価値はあるから。」と言われ、ダメもとで一度相談してみようか、と思ったところから始まった。

それが、「子供も大分大きくなったことだし、何とかやるやろ。申し込んでみたら。」との夫の思いがけない返事。これは何かの縁かもしれない、とにかく進めてみようという気になった。職場の人たちにも事情を説明すると幸いこちらでもOKをもらうことができた。そして最終的にも参加が認められたというわけである。

ところで、一般的に、子持ちでしかも核家族の女性にとって研修は遠い存在である。こんな悪条件にもかかわらず研修に参加できた私はとてもラッキーだったといえよう。先輩の助言、家族の協力、職場の理解、どれを欠いても研修に参加することはできなかった。

そんなわけで、研修が始まると私は、他の大学からはどんな人たちが来ているのかとても気になった。また、気になると調べずにはいられない性格なのでさっそく調査してみたところ、女性の平均年齢が42 - 3歳、男性は37 - 8歳で平均5歳の差があることがわかった。そこで、この5歳の差は何だろう、と思った。改めて参加者を見回すと、女性は独身かまたは子供がある程度大きい人が多く、子育て真っ最中の人はほとんどいなかった。一方、男性はそういった家族の条件とは無関係に参加できているよ

うだった。女性にとって家事と育児はまだまだ最優先すべき仕事なんだな、と改めて感じさせられる結果であった。

また、研修に参加してみて、この種の研修はなるべく早く受けた方がよいと思った。なぜなら、文部省の方針や全国の動きなど、小さな部局図書室、専攻図書室に居ては見えない外の流れが一時とはいえ垣間見えるからである。今回の研修でも、電子図書館や情報リテラシー教育など、いくつかの時代のキーワードが繰り返し講義された。こういった外の動きは一見みえにくいけれども実は私たちの日常業務にも大きなところで影響を及ぼすものであり、それを意識するのとなしなのとは随分違うのではないか、と思った。研修の講師陣は日本の現在の図書館界、図書館行政を代表する豪華な顔ぶれであり、その講義内容は、これからの大学図書館にとっては何が必要かはもちろんのこと、その実現のためには何をポイントに考え、どう行動すべきかにまで及んで、これまで自分では気づかなかった視点を学ぶことができ大変参考になった。また、全国に同業の貴重な仲間ができるというメリットも大きい。

現に、ある大学の人がお世話をしてくれて、研修終了後すぐにメーリングリストが立ち上がり、いま全国レベルで情報交換が盛んに行われている。こんな資料があつたら送って欲しいとか、こういう場合はどうするの？との問いかけに全国からすぐに返事が返ってくる。すごいことだと思う。そして何よりも参加者全員がこの仲間意識をつくり出し、守り、発展させようという気になっている。研修マジックとでも呼べばいいのだろうか。参加者全員をその気にさせる「魔法の場所」が長期研修だといえよう。

(なかむら せつこ)

C O N T E N T S

18世紀フランス建築・都市資料	1
書庫の一隅にて	8
リディア・エリザベト・デル・リット夫人遺贈 『フランス古書簡「マルク・ポスタル」コレクション』について Collection des Correspondances Anciennes et Marques Postales, Don de Mme Lydia Elisabeth DELLITTO	10
附属図書館百周年：『静脩』総目次を読む④	12
：自立・共同・発展のイニシアチブ 京都大学図書館システムの新展開へ	15
オランダの大学図書館事情	17
「英国図書館の未来とイギリスにおける大学図書館の発展」 ：リチャード・ローマン氏講演要旨	20
京都大学経済学部創立80周年記念古典文献展示会開催報告	22
「工学部等文献収集講座 工学情報をgetしよう!」について	24
大学図書館職員長期研修に参加して	27

編集後記

附属図書館は、昨年11月と今年1月に外部評価を受け、「京都大学図書館システムに対する外部評価のまとめと提言」ができました。この中で『静脩』についても述べられています。「附属図書館報という言葉タイトルにちなんで、京都大学図書館システムの広報誌として、編集・作成・配布されてきている。部局図書室の資料や活動状況を紹介したり、相互の連携を求める利用者の声を掲載したり、大学図書館の使命を真正面からとりあげる論説を掲げるなどに見ることができる。」と評価されています。その上で、「従来型の広報活動が繰り返されるだけでは済まないだろう。利用者との双方向のコミュニケーションを図ることが主要な課題となるであろうし、広報活動と図書館における実質的なシームレスにつながるナビゲータ的な機能が期待される。」と指摘されています。今後の編集のための貴重な意見として、大いに活用し、さらに、利用者のためになる『静脩』にしていきたいと思います。(G)